

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：34503
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：26870748
研究課題名(和文) 情報社会における旅行者の地域イメージ関与とそのマネジメントをめぐる実態調査研究

研究課題名(英文) Empirical Research About Tourist Engagement Management for Building a Regional Image in the Information Society

研究代表者
谷村 要 (TANIMURA, KANAME)

大手前大学・メディア・芸術学部・准教授

研究者番号：20579528

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では「聖地巡礼」と呼ばれる旅行者行動およびそれらの行動が見られる地域住民の意識に焦点を当て、アニメファンにより形成された地域イメージが郊外地域の場所性を変容させるプロセスを明らかにすることを試みた。結果、そのような場所性の変容を可能とした一因として、地域住民が自らの地域を「無印の地域」と捉えているがゆえに、場所性の変容を積極的に受け入れていったことを見出した。また、ファンが「聖地巡礼」を通じていかなる承認を得ているかについても知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on tourist behavior which is called "Anime Pilgrimage", and residents' consciousness on the relevant region. Through their survey, it is attempted to clarify how regional image built by anime fans change placeness on suburbs. As a result of interview survey, it is found that local residents perceived what image of their residential areas was "No Brand Region" and thereby the change of placeness was accepted positively. In addition, it is clarified how anime fans contained acceptedness from "Anime Pilgrimage".

研究分野：情報社会学

キーワード：アニメ聖地巡礼 コンテンツツーリズム ファン文化 場所性 メディアコミュニケーション 地域活性化 郊外 無印の地域

1. 研究開始当初の背景

電子メディアの発達が生産の場所性を変容させるという議論は以前よりなされてきた。古くはMarshall McLuhan(Explorations in Communication, 1960)が、テレビ・ラジオの発達に伴い都市の機能が変容したことを議論している。一方で、そのような電子メディアによる都市機能の変容などと呼応するように、「没場所性」(Relph, Place and Placeless, 1976)など、場所の意味が喪失しつつあることも議論されてきた。そこでは、社会の過剰流動性に基づく地域文化の同質化が大きな問題として議論された。この地域文化の同質化については、国内でも1990年代より郊外地域において明確に見られるようになり、2000年以降「ファスト風土化」(三浦展、『ファスト風土化する日本』、2004)や「ジャスロの空間」「国道16号線化」(東浩紀・北田暁大、『東京から考える』、2007)という言葉で問題化されつつある。

この状況の中、メディア上のイメージやネットコミュニティの存在が現実空間へ及ぼす影響が論じられつつある。たとえば、これらの問題については、森川嘉一郎(『趣都の誕生』、2003)や丸田一(『「場所」論』、2008)、若林幹夫(『<時と場>の変容』、2010)、鈴木謙介(『ウェブ社会のゆくえ』、2013)らがすでに取り上げている。ただし、その多くは都市部における事例研究や理論的研究が中心であり、実証的研究は充分になされていない状況がある。

そのような郊外地域の場所性の変容を考える上で、格好のフィールドとして挙げられるのが「聖地」と呼ばれるアニメ作品の舞台とアニメファンから看做される地域である。それらの場所(以下、「アニメ聖地」と呼ぶ)の多くは郊外地域に存在するが、近年、地域外よりファンが多数訪れる観光地となりつつある。これまでの研究で、彼らファンは「アニメ聖地」をただ訪れるだけでなく、住民と交流し、あるいはボランティアとして地域の活性化事業に積極的に関わる姿が見られる。さらに、彼らはソーシャルメディアを通じて自らが訪れた「アニメ聖地」の情報を発信し、地域外から新たなファンを当該地域に呼び寄せている(谷村要、「ジモト型コミュニティの浮上」、『日本情報経営学会誌』vol.32 No.3、2012)。いわば「アニメ聖地」の広報役をも務めているのである。

筆者は、2008年より「アニメ聖地」と呼ばれる場所において、北海道大学観光学高等研究センターの研究者(山村高淑ら)とも協力しながらアニメファンを中心に聞き取り調査を進めてきた。主にそれはコンテンツリズム研究の観点から進められてきたが、その研究の蓄積から、「アニメ聖地」の場所性をめぐる新たな研究課題も明らかになってきた。これらの課題の1つ1つに「答え」を見出していくことが本研究の目的である。

2. 研究の目的

本研究の対象は、これまで筆者の調査研究を通じて明らかになった「アニメ聖地」をめぐる研究課題に対応する。その研究課題としては、たとえば、以下のものが挙げられる。

1. アニメファンの地域への関与を通じた「アニメ聖地」確立の事例研究
2. 「アニメ聖地」化に対する地域住民の意識調査研究
3. 「聖地」イメージの情報伝播プロセスの研究

これらの研究課題に取り組むことで、流動化が進化した社会におけるメディアコミュニケーションを介したイメージの伝播が生産の場所性にもたらす影響、特に郊外地域への影響について新たな知見をもたらすことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

「アニメ聖地」を取り巻く状況については、これまでの研究の蓄積から以下のような概念図を描くことができる。本研究の具体的課題としては、先の研究目的において述べた3つの研究課題が挙げられるが、以下ではそれらを図に反映している。

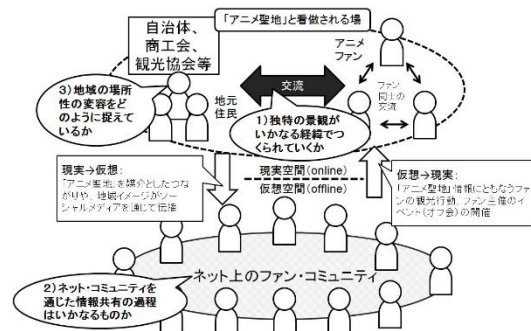


図 3.1. 「アニメ聖地」を取り巻く現状

これらのテーマの内容について記述していくため、調査は質的な調査方法(聞き取り調査、内容分析)を主に取ることになる。

具体的には、筆者がかねてより調査を進めてきた埼玉県久喜市鷲宮と滋賀県犬上郡豊郷町、千葉県鴨川市の地域住民およびアニメファン(聖地巡礼者)への聞き取り調査が中心となる。

4. 研究成果

2014年度(平成26年度)は、これまでの調査で培ったネットワークを活用し、上記地域の商店への聞き取りを進めた。また、多数の「聖地」となった郊外地域を訪れ情報発信を展開するアニメファン(以後、このような聖地巡礼者を「パイオニア型」の巡礼者と呼ぶ。これら聖地巡礼者の類型については以下の論文に詳しい。谷村要、「ファンが「聖地」

に求めるもの』、『地域開発』No.589、2013)が主催するクローズドイベント(「舞台探訪サミット」)に、シンポジウムの司会をおこなうなどの形で参与し、彼らへの聞き取りを行った。一方で、ソーシャルメディアにおける情報伝播について、彼らの書き込み内容を抽出した。

これらの調査で得た知見の一部を踏まえ、郊外地域の住民がアニメファンによる地域関与をどのように承認しているのか、そのプロセスや背景(自らが住まう郊外を「無印の地域」とする認識)を考察した内容の報告を学会や研究会で発表した。さらに、その内容を論文「趣味の包摂が生む地域活性化 アニメ聖地に見る他者の受け入れから」にまとめ、『Nomos』No.35において発表した。

また、これらの調査研究から得た知見が含まれた内容を、2015年3月に提出した博士学位論文「ネットコミュニティが形成する文化事象の社会学的研究 2000年代後半の変容に着目して」にこれまでの研究成果とあわせてまとめている(査読を経て、2016年3月、筆者は本論文により博士学位を取得している)。

2015年度(平成27年度)は、これまでの地域住民への調査を引き続き続けるとともに、2013年以降多くのアニメファンを誘引している茨城県東茨城郡大洗町でも同様の調査を実施した。2014年度より同地域ではプレ調査としてフィールドワークを進めてきたが、その調査の過程で見つけたファンのたまり場となっている店舗の店主たちにインタビューを実施して、「アニメ聖地」としての景観がいかに作りだされてきたか、現状をどのように捉えているかについて聞き取りを行った。その内容の一部については地域活性化学会第7回研究大会において報告している。

一方で、2015年度は、パイオニア型の聖地巡礼者たちへの長時間の聞き取りを実施し、彼らのライフヒストリーを知るとともに「聖地巡礼」行動へのかかわり方についての知見を深めた。

これらの知見を踏まえた研究成果はまだ発表していないため、本報告書ではその調査で得られた知見の一部を示す。

まず一点あげられるのは、複数の「パイオニア型」の聖地巡礼者は、「聖地巡礼」行動と「聖地」に関する情報発信を展開する以前から、ホームページや同人誌などを介した情報発信に積極的であったということである。たとえば、30代半ばの社会人の聖地巡礼者は大学時代より競馬情報を発信するホームページを運営しており、その活動が縁でオフ会などにおいて多様な人びととつながることができた経験がある。本人によると、その経験が「聖地巡礼」行動の情報発信や趣味を介した同好の士とのつながりに積極的となった理由だという。他の「パイオニア型」の調査対象者から得られた知見からも同様の情

報発信とコミュニケーションに積極的な志向がうかがえたが、それらの人びとの中には、さらに地域住民とファンの「橋渡し役」を担う人びとも存在している。

もう一点挙げると、年齢が20代の巡礼者と30代を超えた巡礼者の間では「聖地巡礼」に関わるプロセスが異なっていることであろう。20代の巡礼者の多くはネットや雑誌などですでに多くの「聖地」情報を得ることができており、まだ「聖地巡礼」行動がさほど認知されていなかった時期に「聖地巡礼」行動を始めたファンと状況が異なる。そのため、2000年代後半に活動していた「パイオニア型」の意識(「聖地巡礼」行動そのものが承認された環境の欲求)に比べ、自らが発信した情報が多くのアニメファンに注目されることを通じた承認欲求が強まっている。この「パイオニア型」聖地巡礼者に見られる世代による志向の違いは今後の「コンテンツツーリズム」に関する研究において重要なトピックとなりうるかもしれない。

以上、「研究の目的」で示した研究課題について地域住民・アニメファンへの聞き取りを中心に調査を進め、その調査の結果、「アニメ聖地」確立のプロセスとそれに対する住民の意識およびアニメファンの情報発信の実態に迫ることができた。その一方で、未だ「聖地巡礼」を代表とするコンテンツツーリズム研究は端緒についたばかりであり、当事者たちの世代の移り替わりや志向の違い、それらに伴った地域に必要なマネジメントなど、新たな研究課題も確認された。今後、これらの新たな課題に引き続き取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

谷村要、趣味の包摂が生む地域活性化 アニメ聖地に見る他者の受け入れから、『Nomos』No.35、関西大学法学研究所、2014、pp.35-46.

〔学会発表〕(計5件)

1. 谷村要、ネット社会に生きる若者の感性和陥穽 ソーシャル/承認/オタク、こころの絆創膏セミナー2015、招待講演、2015年11月(名古屋大学)
2. 谷村要、コンテンツツーリズムを活用した地域活性化に資する地域資源~「アニメ聖地」住民への聞き取りから~、地域活性化学会第7回研究大会、2015年9月(大手前大学)
3. 井澤幸三・谷村要、地域創生に連動したワークショップ型デザイン学修、公益社団法人 私立大学情報教育協会「美術・デザイン教育におけるアクティブ・ラーニングの事例研究」集会、招待講演、2015年3月(東京家政大学)
4. 谷村要・石橋裕基・畑耕治郎・藤田昌弘、

自治体によるソーシャルメディア活用の課題と展望～地域 SNS の導入状況の調査から～、第 31 回情報通信学会大会、2014 年 6 月（大阪大学）

5. 谷村要、趣味の包摂が生む地域活性化～アニメ聖地に見る他者の受け入れから～、関西大学法学研究所第 118 回特別研究会「地域活性化と多様性」、招待講演、2014 年 6 月（関西大学）

〔図書〕（計 3 件）

1. 谷村要、『ネットコミュニティが形成する文化事象の社会学的研究 2000 年代後半の変容に着目して』、博士学位論文（提出先：関西学院大学大学院社会学研究科・査読あり）2016 年 3 月、144 ページ
2. 谷村要・石毛弓、協同すること、『キャリア・プランニング 大学初年次からのキャリアワークブック』、ナカニシヤ出版、2016 年 3 月、152 ページ（谷村・石毛 77-90）
3. 谷村要、ネット右翼 共感を増幅するネット空間の危うさ、『現代社会を生きるキーワード 2』、大阪公立大学共同出版会、2015 年 3 月、84 ページ（谷村 12-17）

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

なし

取得状況（計 0 件）

なし

〔その他〕

ホームページ等

・ <http://researchmap.jp/kanamet/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷村要（TANIMURA, Kaname）

大手前大学・メディア・芸術学部・准教授

研究者番号：20579528